SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

菊豆　チュイトウ
JU DOU

1990年／中国・日本映画
配給：AMGエンタテインメント／94分

2025（令和7）年1月4日鑑賞	テアトル梅田

Data　２０２５－３

監督：張芸謀（チャン・イーモウ）
脚本：劉恒（リウ・ホン）
原作：劉恒（リウ・ホン）『菊豆』（徳間文庫刊）
出演：鞏俐（コン・リー）/李保田（リー・パオティエン）/李緯（リー・ウェイ）/張毅（チャン・イー）/鄭建（チェン・チエン）

みどころ

『紅いコーリャン』（87年）で衝撃のデビューを果たした張芸謀（チャン・イーモウ）監督の第三弾たる本作のタイトル『菊豆』は、コン・リーが演じるヒロインの名前。もっとも、1920 年代の中国の農村ではカネで若い嫁を買う因習があったそうだから、菊豆は大変だ。しかも、菊豆の嫁ぎ先のじじい（？）は、性的不能でサディスト！？

そんな設定からは“不倫”の匂いがプンプンするが、案の定、菊豆には玉のような男の子（？）が誕生！これは、一体誰の子？

原作は中国を代表する現代作家・劉恒（リウ・ホン）の小説だから、そんなテーマは何ともスリリング！そして、重大なポイントは、舞台を染物屋に変更したこと。そのため、『紅いコーリャン』に続いて、赤はもちろん、青、黄色等の原色の美しさが顕著。さらに、じじいの葬儀のシーンでは白の美しさにもビックリだ。

“不倫モノ”は今も昔も悲劇的結末と相場が決まっているが、本作の“衝撃の結末”はあなた自身の目でしっかりと！さらにそこでは、なぜヒロインが真っ赤な炎の中に浮かび上がっているのかもしっかりと！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■『菊豆』も20年ぶりに再鑑賞！■□■

チャン・イーモウ監督の『菊豆』（『シネマ 5』76 頁）をはじめて観たのは、2004 年 6 月 19 日だから、20 年前。彼の第 3 弾たる本作も、『紅いコーリャン』（『シネマ 5』72 頁）と同じく赤を基調とした色彩感覚が絶品。加えて、お葬式の場面では、白のカラーがメチャ効いている上、舞台を大胆に染物屋に変更したことによって、赤、青、黄色等の原色に染められた布の美しさが、映画全編を通じて強調されていた。私は第 1 回の鑑賞時の評論

で、思わず<『紅いコーリャン』以上の出来>と書いてしまった（『シネマ 5』78 頁）が、今回もそれが決してオーバーでなかったことを再確認！さらに、入場の際にもらったポストカードを見ると、赤色の布を両手で持つ菊豆（コン・リー）の表情が山口百恵そっくりであることを再確認！

■□■小川夏果さんと並んで鑑賞！２人の一致した感想は？■□■

私の本作の劇場での鑑賞は 2 度目だが、何と今回は、『郷　僕らの道しるべ』(23 年)（『シネマ 56』11 頁）のプロデューサーとして忙しく走り回っている、女優でもある小川夏果さんと 2 人で並んで鑑賞することに。これは、九州の鹿児島に住み、伊地知拓郎監督と共に映画制作活動を続けている彼女が、実家に戻った年末年始に、デートの時間（？）をセットしてくれたためだ。

彼女と会うのは、2024 年 6 月 17 日の上海国際映画祭に出席し、伊地知拓郎監督らと会食した時以来、半年ぶりだ。もちろん彼女はチャン・イーモウ映画のことはよく知っているが、世代的に劇場で本作を観た経験はないはず。したがって、テアトル梅田が年末年始に「張芸謀　艶やかなる紅の世界」を開催してくれたのは、私にとってはもちろん、彼女にとっても超ラッキーだった。事前に購入していた一番前の席で 2 人並んで鑑賞した後の 2 人の感想は、「ああ、やっぱりすごかった！」と「あの子役はすごい！」で一致！

■□■あの時代の農村の因習と不倫ドラマ（？）にビックリ！■□■

本作の全体的な評論は、20 年前に書いた別添の評論で尽きている。しかし 20 年ぶりに再鑑賞してあらためてビックリしたのは、1920 年代の中国の農村における因習と不倫ドラマの構成の見事さだ。そもそも、老人が若い嫁を金で買うという因習自体が、一体どの国の、どの時代の話？誰でもそう思ってしまうが、1920 年代の中国の農村では、そんな因習があったらしい。

本作は、現代中国を代表する作家・劉恒（リウ・ホン）の原作に基づくものだから、こ

の因習はきっと本当の話なのだろう。もっとも、前述したように、原作では菊豆（チュイトウ）の嫁ぎ先は農村だったが、本作では染物屋に変更されている。その変更が“効いた”第１のポイントは前述の色彩美だが、もう１つは、菊豆を金で買った初老の男・楊金山（ヤン・チンシャン）（リー・ウェイ）が経営する染物屋の巨大さだ。楊金山が性的不能者なのか否かは結局はっきりしないが、菊豆は楊氏から新妻らしき性愛を受けることなく、逆に、毎晩、性的虐待を受けていたからアレレ、アレレ。さらに、楊金山は拾った天青（ティエンチン）（リー・パオティエン）を自分の甥としながらも、後継者とすることを拒み、あくまで安上がりの労働力とみなしていたからアレレ、アレレ・・・。

そんな中、楊金山は菊豆が生んだ男の子の誕生を喜び、楊天白（ティエンパイ）（チャン・イー）という立派な名前をつけて、楊家の後継者と定めたが、そもそも、この天白は誰の子？少なくとも、観客には彼は菊豆と天青との不倫の結果生まれた子であることは明らかだ。不倫モノは映画でもTVドラマでも常に人気だが、まさか1920年代の中国の農村で、こんなでっかい染物屋を舞台に、こんな不倫ものがあったとは！

■□■不倫の悲劇は想定内だが、更なる楊家の悲劇にビックリ■□■

93分の本作が最後まで緊張感を持ってスピーディーに展開していくのは、天白が菊豆と天青の子供ではないかと推測されるものの、結局それが表面化しないまま、菊豆と楊金山との間に生まれた楊家の跡取り息子だという“虚構”でストーリーが進んでいくためだ。菊豆は早くからそれを天白に打ち明けたいと思っていたが、「それはダメだ」と頑なに拒否していたのは天青。要するに、「男は優柔不断だが、女は決断が早い」ということだ。しかし結局、コトあるごとに、この天青の“抑止力”が効いたため（？）、思わぬ形で楊金山が死んでしまった後は、幼い天白が正式に楊家の後継者と定められ、菊豆は永久に“後家”を通すことに。そしてまた、天青は同じ屋根の下で過ごさないことと決められてしまったから、菊豆も天青も大変だ。その上、菊豆も天青も毎年１つずつ年を取っていくのに対し、天白は１年ごとに成長し大人になっていくから、引き続き隠れてコソコソと続けている２人の不倫関係がバレるのは時間の問題？そう思っていると、案の定！

本作の脚本の妙の１つは、天白が口を利くのが遅いこと。そんな天白が初めて口を利いたのは、「お父さん」という言葉だったのもすごいが、少年期になった天白（チェン・チエン）が、無言のままニヤリと笑う不気味な表情で、水の中に落ちた天青に向かって太い薪を振り下ろすシーンには、思わずゾー。それを目撃した菊豆の、気も狂わんばかりの狼狽ぶりや叫びぶりもさすが、女優コン・リーの演技力とチャン・イーモウ監督の演出力だ。その結果、本作ラストに見る楊家と染物屋の悲劇とは？

『紅いコーリャン』では、コーリャン酒で作った火炎瓶を武器とした余占鰲（ユイ・チャンアオ）と九児（チウアル）たちの力で、日本軍の車両を爆破することに成功したが、他方でコーリャン酒屋は大きな悲劇を生むことになったが、さて本作に見る楊家の悲劇は？

2025（令和７）年１月６日記

2004（平成16）年6月19日鑑賞　＜シネ・ヌーヴォ＞

菊豆（チュイトウ） Ju Don

張藝謀（チャン・イーモウ）監督

鞏俐（コン・リー）／菊豆（チュイトウ）　李保田（リー・パオティエン）／天青（ティエンチン）
李緯（リー・ウエイ）／楊金山（ヤン・チンシャン）

配給：東光徳間
1990年／中国映画／93分

★★★★★

張藝謀監督の第3弾。金で買われて老人のもとへ嫁ぎ、性的虐待を受ける主人公菊豆の不倫ドラマともいうべき作品で、鞏俐の熱演が光る。最後は「紅いコーリャン」と同じく悲劇的な結末が…。舞台を染物屋に変更することによって実現した赤を基調とした色彩美は絶品で、この映画の出来は「紅いコーリャン」以上！

＜『紅いコーリャン』に続く張藝謀監督の第3作＞

『紅いコーリャン』（87）で鮮烈な監督デビューを飾った張藝謀監督が、第2作『ハイ・ジャック／台湾海峡緊急指令』（88）をはさんで監督した第3弾がこの『菊豆』（90）。『紅いコーリャン』は中国の田舎に生きる主人公たちの生活を描きながらも、1930年代に入ると、平和な生活を営んでいた主人公たちの前に残忍な日本軍が登場し、主人公たちはやむをえずこれと「対決」するという悲劇的な結末となっている。

しかしこの『菊豆』は、初期の張藝謀監督らしく、貧しく封建的な田舎まちで、金で買われた形で染物屋の主人、楊金山（李緯）に嫁いでいく菊豆（鞏俐）が主人公。そして驚いたことに、この映画のテーマは今風に言うと、その菊豆と金山に拾われ金山の甥として染物屋で働き生活している天青（李保田）との間の「不倫」。張藝謀監督作品に欠かすことのできない鞏俐の若き日のちょっとしたヌード姿（？）を拝むことができる貴重な作品。最近でこそ、『たまゆらの女』（02）の中で、少し熟女

となった(?)鞏俐のヌード姿(?)が披露されたが、今までの鞏俐主演の作品にはそういう役柄が全くなかったため、その意味でもこの『菊豆』の映像は貴重(?)。

<染物屋への設定変更が大成功!>

張藝謀監督特有の色彩美はこの映画でも健在。現代中国の代表作家、劉恒の原作では菊豆の嫁ぎ先は農家だったが、色彩美を表現するため張藝謀監督はあえてこれを染物屋に設定変更したとのこと。映画の全編を通じて現れる赤、青、黄色等の原色に染められた布の美しさは、大きな染物屋の建物のセットと相まって、『紅いコーリャン』以上。一体どんな作業行程で染めあげているのかはよくわからないが、染めあげられた大きな布が高く吊るされた建物の中で繰り広げられる作業のシーンは興味深い。またその建物の中で毎夜繰り広げられる金山の菊豆に対する性的虐待や、その裏返しとしての菊豆と天青との不倫の物語も説得力があり、今の時代でも十分新鮮なものとなっている。

<ショッキングな水槽内での殺人事件(?)>

ショッキングなのは、染料を溶け込ませた水槽の中でおこる2つの殺人(?)事件。真っ赤な染料が溶け込んだ水槽の中で、中風で下半身がマヒした金山が溺れているのをじっと見つめる、菊豆と天青の子である幼少時代の天白は不気味。そしてまた、少年に成長した天白が、水槽の中からやっと手を伸ばして木につかまっている実の父親、天青の頭を棒切れで殴り殺してしまうシーンもショッキング。そして圧巻は、建物に火をつけた菊豆の手によって、美しい染め物や建物全体が真っ赤に燃えあがっていくシーン。これらの効果は、すべて物語の設定を染物屋としたことによるものだ。

<3人の人間模様は…?>

若い嫁をもらい、「楊家のために何とか男の子の跡継ぎを!」と願いながら、老人の金山は性的不能者だから、子供をつくることができない。その結果、毎晩菊豆を性的に虐待し、早く子供をつくれと迫るだけ! そんな金山によって傷つけられた菊豆の身体を、家畜小屋の穴の中から覗き見していたのが天青。偶然それを知った菊豆は驚くものの、今度は、覗き見されていることを知りつつ…。そして金山の留

守中、天青を誘う菊豆。こうなると女の方が強い!

金山を恐がる天青も、この菊豆の誘惑に負けて(?)、2人は秘密の仲に…。そして生まれてきたのが天白。自分の子供が生まれ、跡継ぎができたと喜ぶ金山だが、世の中、それほど甘くはない。ある日、天青との不倫がバレた菊豆は、中風で倒れている金山に対して、「天白はあなたの子供ではない。天青との間にできた子供だ」と冷たく言い放った。そして、ほとんど生きる屍のような状態の金山を屋敷の中で養いながら、菊豆と天青の楽しい生活を金山に見せつけるという計画は天白の成長と共にうまくいくかと思えたが…。

期待されて生まれた跡継ぎ息子の天白だが、口をきくのが遅い。何か障害があるのではと心配する菊豆。そんな天白が、ある日はじめて口をきいたのは「お父さん」という言葉。それも金山に対してだ。それまでうちひしがれ、ご先祖さまに対して菊豆、天青の2人への罰を願い、ある時は天白を殺そうとまで思っていた金山だが、これには有頂天となって大喜び。以降、楊家での生活のバランスは微妙なものになった。

そんな中、突然おこった水槽の中での金山の死。菊豆がヒ素を盛ったためではないことがわかり安心した天青だったが、この金山の死亡により楊家の跡取りは天白と決まった。そして未亡人となった菊豆と同じ家に天青は住むことはできないと楊家の長老たちによって決定したことで、2人の関係はますます不便になっていった。そして隠れて時々密会していることを天白は知っている様子。そんな中、遂に天青も水槽の中で…。幼少時代からこの天白という子は少し不気味だったが、少年に成長し楊家の跡取りとなった後の天白の意外な個性はちょっと見モノ。不倫関係にあった菊豆と天青との間に生まれた天白の意外な個性が、菊豆と天青をめぐるその後のドラマティックな人間模様と楊家の悲劇を生み出す大きな原因となっている。

<『紅いコーリャン』以上の出来>

この『菊豆』は、カンヌ国際映画祭ルイス・ブニュエル賞等を受賞したが、一般的には『紅いコーリャン』を超える評価はされていない。しかし私の目からみると、たしかに『紅いコーリャン』は衝撃的な作品だったが、この『菊豆』の方が作品としての完成度は高いのではないかと思うほどよくできた映画。是非多くの皆さんに観てもらいたいものだ。

2004(平成16)年6月21日記